

女夫龍神の祭祀

— 家族による信仰の伝承と祭祀に関わる社殿の現況調査について —

舟山直治・尾曲香織・鈴木明世・高橋佳久

Key Words 祭礼 (Festival)、奉納物 (Offering)、神社建築 (Shrine architecture)、民俗文化財 (Folk-cultural property)、保存科学 (Conservation science)

1 はじめに

本稿は、北海道博物館（以下、当館とする）による「北海道の自然・歴史・文化」総合研究プロジェクトとして「北海道における戦中・戦後のくらしの変化に関する聞き書き調査」（以下、聞き書き調査とする）における個別調査の報告である⁽¹⁾。

調査対象は、札幌市中央区南28条西11丁目に鎮座している女夫龍神（図1）である。この調査の発端は、2022（令和4）年4月19日に当館へ電話連絡のあった資料の寄贈情報をもととなっている⁽²⁾。情報の内容は、現在、情報の提供者の祖母が女夫龍神の祭祀を受け継いでいるものの、高齢のため近く廃社も考えなければならぬというなかで、博物館で歴史資料として残せないものか、と連絡されたものである。

現在、博物館や郷土資料館の多くは、収蔵庫の空間的な制約により、有形の民俗文化財、とりわけ大型で大量の資料群の収集が難しくなっているといえる。しかしながら、実物資料の収集はかなわないまでも、祭祀の現況といった無形民俗文化財や奉納物や社殿などの有形民俗文化財を対象に調査し、記録化していくことは、聞き書き調査の目的に合致していると考え、2022年度の個別研究として取り上げた。

また、女夫龍神の場合は、将来の廃社を見越しての資料情報であったことから、少なくとも年度内の祭祀調査が可能であった。しかも、調査にあつて、所有者の本間茂氏が全面的に協力体制をとっていただけのことから、2022（令和4）年5月1日から2023（令和5）年1月8日まで調査を実施し、女夫龍神の祭祀と境内の現況としてまとめるものである。

2 当館における民俗文化財調査

個人や地域の篤志が祭祀する小祠の行方について、当

館の「戦前・戦中・戦後における道民生活の変遷に関する聞き書き調査」（2015～2019）の個別課題として、積丹町の来岸、余別、柗泊、神岬の各地域で祀られている川下神を対象に祭祀状況を観察してきた。特に人口減に悩む地域において信仰の継承が難しくなっている実態を把握するため、2020（令和2）年からの聞き取り調査においても継続して調査を行っている。この8ヶ年にわたる4地域の調査で喫緊の課題となったのは、過疎化が進む中で祭祀の伝承が難しくなり、将来を見通せなくなった以降のご神体やさまざまな奉納物の行き場についての検討である。これらの行き場の一つとして必ず話題に上るのは、寺社への合祀や地域の資料館や博物館への寄贈なのである。しかし、モノの行き場の検討を経る前に、地域の判断だけで「処分されることも少なくない。

一方、2021（令和3）年10月13日には、札幌市北区北7条西7丁目偕楽園緑地にあった井頭龍神社に関する当館への資料寄贈の情報があった⁽³⁾。この資料は、同社に納められていた札幌神社の渡御祭に用いられたと伝わる山車の櫓（幅1.8m、奥行1.9m、高さ2.8m）であったが、翌14日に社殿が解体されるという状況下であったため、重機が控えている中での写真撮影と聞き取り調査で終わった。情報提供者によると、この龍神は、明治（1868～1912）頃、同地にあった料亭の主人が夢の中で託宣を受けて、サクシュコトニ川の中洲に祀ったものであるという。祭日は8月19日で、1965（昭和40）年前後には日蓮宗の寺院が、その後2019（令和元）年頃には札幌諏訪神社が関わって祭祀をしていた。このように資料が大型で、かつ寄贈申込の是非を検討する時間もないことなどから当館では収集できない、とその場で回答せざるをえなかった。いうまでもなく限られた日程の中で、あるいはすでに廃社となった場合の無形・有形民俗文化財の記録化は難しい。ただこの資料情報の顛末は、最終的に札幌建築鑑賞会が山車の櫓やご神体を回収し保管されることになり、廃棄の憂き目に遭わなかったことはせめてもの救いであった。

3 女夫龍神の調査項目と担当

女夫龍神については、『さっぽろ歴史散歩 山の辺の道・定山溪紀行』（山崎 1995：55）に、石山通を南下しながら解説をしている中で、次のように紹介されている。

さらに南進すると、西十一丁目側にちょっと林に包まれたところがある。広さは四五〇坪（約一四八〇平方メートル）あるという。ここはかつて兵村追給地であったが、大正十年に本間トクが取得した。本間トクは北海石版社長本間清造の身内である。

本間トクは昭和二十五年一月、八〇歳で死去したが、昭和六十三年死去した孫の本間章介が大正十年に生まれ、生来病弱であったので健康を気づかい何とか健康に過ごせるよう願っていた。またここは豊平川がかつてこの地を流れ犠牲者があったことに加え、道路工事にも犠牲者が出たことから、昭和三三年これらの病難・地難・水難よけを祈念し、大石を祭神に社殿を建立、女夫龍神を祀った。

また、その隣りに油掛大黒（尊）天を祀った。これは昭和三十五年に京都の道徳振興のための修養団体である徳風会（初代会長長武谷聡進）が建立した社

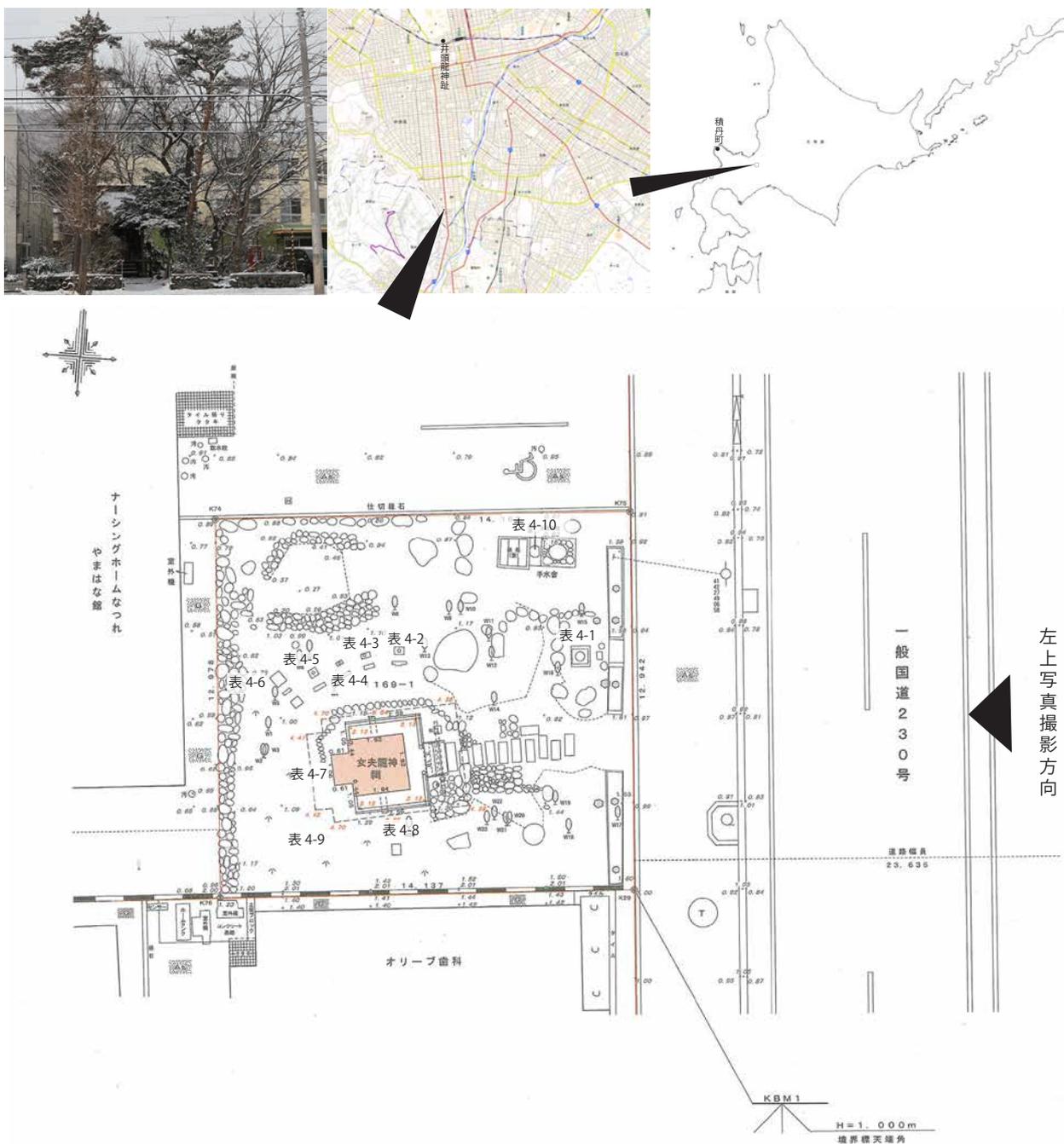


図1 女夫龍神配置図（株式会社大場測量による女夫龍神社現況高低測量、及び国土地理院地図を元に作成）

がある。その由来は今から五〇〇年程前にさかのぼる。

このように、北海石版社長の本間清造の妻である本間トクが1928（昭和3）年に建立した女夫龍神について記されている。しかし、「マリア手芸室、松村富美子からの調査の要約」（山崎 1995：56）とある情報源について、聞き取り対象者が松村智恵子氏であることを「札幌時空遺通」（keystonesapporo 2015）の中で指摘されているように誤記もみられる。さらに、同書の図「女夫龍神と油掛大黒尊天」には、女夫龍神と油掛大黒尊天が並んで祀られているものの、後者の祭祀と本間家の関係を明らかにしていない⁴⁾。

以上から、本稿では、改めて松村智恵子氏の聞き取り調査を進めて、女夫龍神の祭祀の経緯について整理するとともに、建造物や奉納物の配置や祭祀の現状を記録に残すものである。

この調査の担当は、聞き書き調査のメンバーである、尾曲香織が例祭の様子、鈴木明世が女夫龍神の建築について、舟山直治が祭祀の経緯と月次祭を担当して調査することとした。あわせて聞き書き調査メンバーではないが、周辺環境の中で奉納物や建造物などの劣化がどのように生じているのかについて明らかにすることを目的に高橋佳久が調査に加わった。

4 女夫龍神祭祀の経緯について

ここでは、女夫龍神を祭祀する経緯のほか、合祀された祭神と社殿及び境内の主な奉納物について記述する。

(1) 女夫龍神の祭祀と本間家

表1⁵⁾に示したように、女夫龍神を1928（昭和3）年に建立した本間トクは、1873（明治6）年に本間誠一の娘として現在の両津市に生まれた。名前は、徳あるいは徳子とも表記されたものがある。トクは、1887～1891年（明治20年代前半）に、1863（文久3）年に製油業本間宇源太の四男として現在の佐渡市に生まれた本間清造と結婚した。清造、トク夫妻の家族は、1899（明治32）年に長女テイ（貞）、1902（明治35）年に長男紹夫（清・二代目清造）の一男一女である。

トクが1950（昭和25）年に歿した後、実質的に女夫龍神を祭祀したのが長女のテイである。テイは、1891（明治24）年に笠井（旧姓林崎）永助、ユキ夫妻の次男として生まれた時之助と、1918（大正7）年に婿養子縁組をした。時之助、テイ夫妻の家族は、1921（大正10）年に長男章介、1914（大正13）年に次男邦雄、1926（大正15）年に三男久雄、1928（昭和3）年に長女智恵子、1932（昭和7）年に四男誠一の四男一女である。

本間章介が1921（大正10）年に生まれた際に、トクは孫の初男児を祝って、後に女夫龍神を祀ることになる札幌市中央区南28条西11丁目の土地約500坪を購入した。

1928（昭和3）年は、初代清造が2月10日に歿したほか、智恵子氏が9月10日に生まれた年である。そして、当時55歳であった本間トクが施主となって、9月16日を例祭日とし、女夫龍神を建立したのである。「女夫龍神由来①」（図版10-1）によると、教義は「神の守護を信ずることに依り、心の平安を求め、和を以て人と交わり世の平和を祈念する」となっている。この教義は、『さっぽろ歴史散歩 山の辺の道-定山溪紀行』（山崎 1995：55）で示されている章介の健康、豊平川の流れや道路工事の犠牲者に向けて病難、地難、水難よけを祈念して祀られたとする記載との関連はみられない。

本間テイが1977（昭和52）年に歿した後、実質的に女夫龍神を祭祀したのが長男の章介と松村智恵子氏（旧姓本間）である。章介には子がなく、松村亮一氏、智恵子氏夫妻の次男茂氏と養子縁組をしている。そして、章介が1988（昭和63）年に歿した後、茂氏が女夫龍神を継承し、現在に至っている。

(2) 女夫龍神と笠井家

表1のとおり、1862（文久2）年に笠井忠三郎の娘として佐渡市に生まれた笠井ユキは、1882（明治15）年前頃に林崎永助と婿養子縁組した。永助、ユキ夫妻には、1882（明治15）年に長男幸太郎、1891（明治24）年には次男時之助が生まれている。時之助は、1918（大正7）年に本間テイと婿養子縁組をしている。

笠井ユキは、1933（昭和8）年に長男幸太郎の病氣全快祈鎮護のため、現在の千歳市千代田町1丁目に龍神を祭祀した。「女夫龍神由来①」（図版10-1）によると、1957（昭和32）年に笠井ユキが歿した後、1962（昭和37）年に女夫龍神へ合祀された。

(3) 女夫龍神と油掛大黒尊天

油掛大黒尊天は、『さっぽろ歴史散歩 山の辺の道-定山溪紀行』（山崎 1995：55）によれば、1960（昭和35）年に女夫龍神境内の北側に石山通に面して祀られている。同書の図版には、本間トクが章介のために購入した土地の敷地内に女夫龍神と並んでいることがわかる。この土地は、2011（平成23）年に女夫龍神境内約50坪を残して、株式会社ネイチャーへ売却された。土地の売却に伴い、油掛大黒尊天は移転されている⁶⁾。

この油掛大黒尊天の建立について、松村耕一氏によれば、1960（昭和35）年に本間テイが京都の竹谷聡進に便宜をはかったものという⁷⁾。

表1 女夫龍神社関係年表

西暦年	和暦年	月	日	内容
不詳				林崎永助、後の笠井永助、新潟県渡佐郡で出生。
1862	文久2	2	8	笠井ユキ、新潟県佐渡郡、笠井忠三郎の娘として出生。
1863	文久3	3	17	本間清造、新潟県佐渡郡畑野村大字畑本郷70番地、製油業本間宇源太の四男として出生。
1873	明治6	4	22	本間トク（徳子）、新潟県佐渡郡両津、本間誠一の娘として出生。
1882	明治15年前頃	—	—	笠井（旧姓林崎）永助・笠井ユキ、婿養子縁組。
1882	明治15	12	7	笠井幸太郎、笠井永助・笠井ユキ夫妻長男出生。
1887	明治20	11	25	清造、札幌で荒物業（屋号 ^{ダキヤ} ダキ）を開業していた熊吉（実兄）を頼って、渡道。
1887～1891	明治20年代前半	—	—	本間清造・本間トク結婚
1891	明治24	12	3	笠井時之助、笠井永助・笠井ユキ夫妻次男出生。
1893	明治26	2	—	北海石版所を譲り受けて創業。
1896	明治29	—	—	笠井永助歿。
1899	明治32	3	15	本間テイ（貞）、本間清造・徳夫妻の長女として出生。
1902	明治35	11	30	本間紹夫（清・二代目清造）、本間清造・トク夫妻の長男として出生。
1905	明治38	10	—	笠井忠三郎歿。
1918	大正7	11	6	笠井時之助、本間テイと婿養子縁組。
1919	大正8	11	8	本間紹夫、小池国信三女喜佐代と結婚。
1921	大正10	4	8	本間章介、本間時之助・本間テイ夫妻の長男として出生。本間トク、孫初男児を祝いとして、現在の札幌市中央区南28条西11丁目に土地約500坪を章介に贈呈。
1928	昭和3	2	10	本間清造歿。
1928	昭和3	—	—	本間トクが施主となり、女夫龍神を章介に贈呈した土地に建立。例祭日9月16日
1933	昭和8	9	24	笠井ユキ、子息幸太郎の病氣全快祈鎮護のため現在の千歳市千代田町1丁目に龍神を勧請。表3-3、図版4-4・5。
1934	昭和9	6	8	本間トクが願主となり、龍神へ御札を奉納。表3-5、図版4-7。
1934	昭和9	8	—	本間テイ、女夫龍神境内の地藏尊を奉納。表4-2、図版5-2。
1942	昭和17	5	28	笠井ユキが願主となり、栄光龍神を勧請する。表3-4、図版4-6。
1950	昭和25	1	30	本間トク歿。
1957	昭和32	6	18	笠井ユキ歿。
1960	昭和35	—	—	徳風会（初代会長竹谷聡進）による油掛大黒尊天の建立。
1962	昭和37	—	—	笠井ユキが祭祀していた龍神を女夫龍神に合祀。
1977	昭和52	1	8	本間テイ歿。
1978	昭和53	—	—	鳥居を再造。
1980	昭和55	9	16	本間喜佐代、伊藤三四郎の両名女夫龍神幟を奉納
1985	昭和60	—	—	女夫龍神祠の屋根を補修。女夫龍神の神額（図版6-4）奉納。
1986	昭和61	—	—	女夫龍神祠の欄干、柱、側面を補修。
1988	昭和63	4	19	本間章介歿。以後、章介養子、本間茂が継承し現在に至るが、女夫龍神の土地は国道230号の拡幅工事に伴って一部を売却していたため450坪となっていた。同月、章介宅にあった福助像（表4-7、図版5-7）を女夫龍神に奉納。
1994	平成6	—	—	鳥居倒壊により再造。
2004	平成16	9	8	強風のため鳥居倒壊。
2011	平成23	9	8	母家部分約400坪を売却。油掛大黒尊天を遷座。

(4) 女夫龍神の祭神と奉納物

祭神について、『さっぽろ歴史散歩 山の辺の道-定山溪紀行』（山崎 1995：55）には、「大石を祭神」として社殿を建立したとあるが、社殿の内外に相応するご神体はない。また、社殿の内陣に納められた神棚（図版2-1）内にも、ご神体はみらなかった。

内陣には、表2の本間家の女夫龍神に関するものが15件と、表3の千歳市笠井家の龍神に関するものが6件の計21件の奉納物が納められている。

まず、本間家の龍神関係奉納物は、神棚のほか、御鏡（表2-2、図版2-2）、灯籠（表2-3、図版2-3）、狛犬（表2-4、図版2-4）、木立像（表2-5、図版2-5）、珠（表2-6、図版2-6）、御札（表2-7、図版2-7・8）、双頭白蛇8個（表2-8～15、図版3-1～8）である。これらの奉納年代はいずれも不詳であった。また、御札の表（表2-7、図版2-7）には、二聖と二天が記されているが、

これは後に記す千歳市笠井家の龍神御札（表3-2、図版3-3）と同様の記述でもある。両社とも同じ神を祀ったものか、合祀したなかで入れ替わったのかは不明である。同裏（表2-7、図版2-8）には、八大龍王の記載もある。

次に笠井家龍神関係奉納物は、厨子（表3-1、図版4-1）とその中に収められた御札（表3-2、図版4-2・3）のほか、御札（表3-3～6、図版4-4～8）の4件である。笠井家の龍神の奉納物は、笠井ユキが1957（昭和32）年に歿してから、3年後に女夫龍神へ合祀された際に社殿内に納められた。表3-2の御札は、表面に「二聖○○○鬼子母神／南無法蓮華経妙正龍神／二天○○○十羅刹女」とあるように、先の女夫龍神の御札（表2-7、図版2-7）と同様に二聖、二天がみられる。中央には、妙正龍神と記されている。表3-3の御札は、不鮮明ながら表面（図版4-4）には1933（昭和8）年の記述がみられる。また裏面（図版4-5）には、「千歳郡千歳村市街地住人

表2 女夫龍神内陣、本間家龍神関係奉納物

No.	名称	数量	呼称	大きさ（単位：mm）	備考
1	神棚	1	宇	幅800、奥行586、高さ800	一社宮
2	御鏡	1	枚	径75、奥行2、台を含めた全高115。	台付（幅115、奥行30、高さ67）
3	灯籠	1	対	（幅76、奥行67、高さ153）×2	灯籠と台の2分割。片方の灯籠部割れあり。
4	狛犬	1	対	図左:幅237、奥行106、高さ215。 図右:幅242、奥行115、高さ220。	
5	木立像	1	体	幅37、奥行30、高さ160	奉納物の一つで詳細不詳
6	珠	1	個	径90、台を含めた全高190。	台付（幅205、奥行100、高さ102）
7	御札	1	体	幅102、奥行31、高さ146	表 二聖○○○ 南無多寶如来 南無法蓮華経 南無釈迦牟尼仏 二天○○○ 裏 奉信敬八大龍王守護○
8	双頭白蛇	1	個	幅138、奥行110、高さ88	抱宝珠、阿に巻物有り
9	双頭白蛇	1	個	幅158、奥行138、高さ110	抱宝珠、阿に巻物有り
10	双頭白蛇	1	個	幅70、奥行62、高さ57	抱宝珠、阿に巻物有り
11	双頭白蛇	1	個	幅63、奥行55、高さ43	抱宝珠、阿に巻物有り
12	双頭白蛇	1	個	幅40、奥行38、高さ35	抱宝珠、咩頭折れ有り
13	双頭白蛇	1	個	幅50、奥行50、高さ45	抱立像
14	双頭白蛇	1	個	幅42、奥行39、高さ36	抱宝珠
15	双頭白蛇	1	個	幅34、奥行33、高さ33	抱宝珠

表3 女夫龍神内陣、笠井家龍神関係奉納物

No.	名称	数量	呼称	大きさ (単位: mm)	備考
1	厨子	1	宇	幅281、奥行185、高さ412	中に、表4-2の御札が納められている。
2	御札	1	体	幅121、奥行91、高さ193	表 二聖〇〇〇鬼子母神 南無法蓮華経妙正龍神 二天〇〇〇十羅刹女
3	御札	1	体	幅349、奥行111、高さ430	表 昭和八年九月二十四日吉〇 ほか不鮮明で読み取れず。 裏 千歳郡千歳村市街地住人笠井ユキ女 子息幸太郎氏病氣全快祈鎮護ノタメ 右ユキ女本堂宇ヲ建立シ罪障消滅ヲナス ベク龍神ノ勸請ヲ発願ス南妙法蓮華経 謝曰靈法両滅除煩惱悦衆生故〇〇〇神力 題 如世尊教当具奉行如説修行功德善多 発願人 笠井ユキ 勸請人 知龍〇花押
4	御札	1	体	幅172、奥行47、高さ520	表 南無法蓮華経奉勸請栄光龍神鎮座守護之処〇 裏 如来秘密 干時昭和十七年五月二十八日勸請願主笠井ユキ 女 神通之力
5	御札	1	体	幅650、奥行44、高さ458	底面 昭和九年六月八日 願主本間徳子 中教正中垣善〇〇
6	御札	1	体	幅310、奥行93、高さ320	表 正千歳郡千歳村住人笠井ユキ謹白 右側 得大神通身出光明 左側 如来秘密神通之力 裏 奉勸請〇〇〇神蜜〇〇〇

笠井ユキ女 子息幸太郎氏病氣全快祈鎮護ノタメ 右ユキ女本堂宇ヲ建立シ罪障消滅ヲナス ベク龍神ノ勸請ヲ発願ス南妙法蓮華経」といった祭祀の由来を示した記述がみられる。表3-4の御札(図版4-6)は、表面に「南無法蓮華経奉勸請栄光龍神鎮座守護之処〇」、裏面には「干時昭和十七年五月二十八日勸請願主笠井ユキ女」との記載があるように、1942(昭和17)年に笠井ユキは栄光龍神を勸請している。表3-5の御札(図版4-7)は、底面に「昭和九年六月八日 願主本間徳子 中教正中垣善〇〇」の記載があることから、1934(昭和9)年に本間トクが奉納したものと理解できる。ただ、この御札についても、笠井家の御札として振り分けられてはいるが、合祀したなかで後に入り混じった可能性もある。表4-6の御札(図版4-8)は、4角柱表面から右回りに、「正千歳郡千歳村住人笠井ユキ謹白」、「得大神通身出光明」、「如来秘密神通之力」、「奉勸請〇〇〇神蜜〇〇〇」と記されている。

油掛大黒尊天に関わる祭神や奉納物は、女夫龍神社殿には納められていない。

(5) 境内の奉納物

女夫龍神の境内には、表4に示した12件の奉納物がある。境内正面の入口右横には、地蔵尊(表4-1、図版5-1)がある。かつて境内入口には鳥居があった。表1に示したように、少なくとも1978(昭和53)年と1994(平成6)年には鳥居を再造している。後者の鳥居は、2004(平成26)年9月8日の強風のため鳥居が倒壊し、それ以降、鳥居を再造していない。

境内を入り、社殿の右横には、1934(昭和9)年8月に本間テイが奉納した「ホンマ」銘が入った地蔵尊(表4-2、図版5-2)があるほか、馬頭観音碑(表4-3、図版5-3)、馬頭観音碑(表4-4、図版5-4)、地蔵尊(表4-5、図版5-5)、「正一位稻荷大神」銘の入った祠(表4-6、図版5-6)が並んでいる。稻荷の祠には、阿吽の狐と神

表4 女夫龍神境内の奉納物

No.	名称	数量	呼称	大きさ (単位: mm)	備考
1	地藏尊	1	基	総高1,925、総幅730、奥行640	図版5-1、左手に宝珠、右手錫杖跡 (現在数珠有り)
2	地藏尊	1	基	総高1,075、総幅350、奥行290	図版5-2、「ホンマ」、背面「昭和九年八月 本間貞」、左手に宝珠
3	馬頭観音碑	1	基	総高475、総幅300、奥行180	図版5-3
4	馬頭観音碑	1	基	総高580、総幅240、奥行130	図版5-4
5	地藏尊	1	基	総高890、総幅320、奥行255	図版5-5、20221231女夫龍神
6	稻荷神祠	1	基	総高690、総幅355、奥行325	図版5-6、妻入り。背面「正一位大正稻荷大神」、阿吽の狐、神像有り
7	福助	1	基	総高520、総幅550、奥行320	図版5-7、福助足袋の看板人形を奉納したもの。
8	稻荷神? 祠	1	基	総高550、総幅410、奥行550	図版5-8、平入り。稻荷神と考えていた。
9	自然石	1	基	高さ300、幅380、奥行き250	図版6-1。
10	手水舎	1	基	高さ650、幅3,150、奥行き1,650	図版6-2。
11	神額	1	基	高さ635、幅495、奥行き170	1985 (昭和60) 年に、図版6-3の神額に替えて図版6-4の神額を奉納。
12	鈴と鈴縄	1	件	鈴紐長1,150、最大幅85。鈴径120×2	図版6-5・6。奉納「マリヤ」。

像が納められている。

社殿裏の下側に納められている福助像 (表4-7、図版5-7) は、章介宅にあったものを1988 (昭和63) 年4月に女夫龍神へ奉納したものである。

社殿左側には、稻荷神と伝わる祠 (表4-8、図版5-8) や自然石 (表4-9、図版6-1) がある。

境内北西、ナーシングホームなつれやまはな館に接して手水舎 (表4-10、図版6-2) がある。松村智恵子氏によると、石山通に面していたため、交通の要所で、井戸もあったことから、馬の水飲み場になっていたという。

1985 (昭和60) 年には、古い神額 (図版6-3) に替えて新たらしい神額 (表4-11、図版6-4) が奉納された。また、株式会社マリヤ手芸店から奉納された鈴と鈴縄 (表4-12、図版6-5・6) がある。

社殿内には (図版6-7)、以上のほかにも龍を描いた扁額、龍状の木の枝、龍の墨絵、龍の置物が奉納されている。さらに、御神酒筋立、朱色の三宝、ガラスの燭台、八脚案などがある。

(舟山直治)

5 女夫龍神の建築について

ここでは、女夫龍神の社殿の建築について、実測調査をもとに、その概要を記述する。実測図は、図2に示す。

なお、寸法は尺貫法を基本として記載している。

(1) 建築概要

女夫龍神の敷地 (境内) は、南北を通る国道230号の西側にあり、南北に約13m、東西に約14mである (図1)。社殿は、敷地内中心からやや南西の位置に、立地しており、敷地の東側入口より約2mの地点から、社殿にかけて10段の飛石が配置されている。敷地の入口には本来鳥居が存在していたが、倒壊し、撤去されている (詳細は7で後述する)。

社殿の創建は、表1において1928 (昭和3) 年とされているが、具体的な年月日については明らかでない。今回の調査では屋根裏の調査は行っていないため、棟札等は未確認である。

(2) 建物の構造形式と規模

社殿は、一間社流造で、屋根は板金葺である。身舎は梁間61.5寸 (1,860mm)、桁行61.5寸 (1,860mm) に、背面側に梁間32寸 (970mm)、桁行20寸 (600mm) の内陣が飛び出している。床は高さ30寸 (910mm) の高床式で、内陣以外の3面には20寸の縁が設けられ、その正面側に幅34寸 (1,030mm) の階段がある。また、向拝柱は、身舎 (柱から葦々) で39寸 (1,182mm) 離れた位置に建てられている。

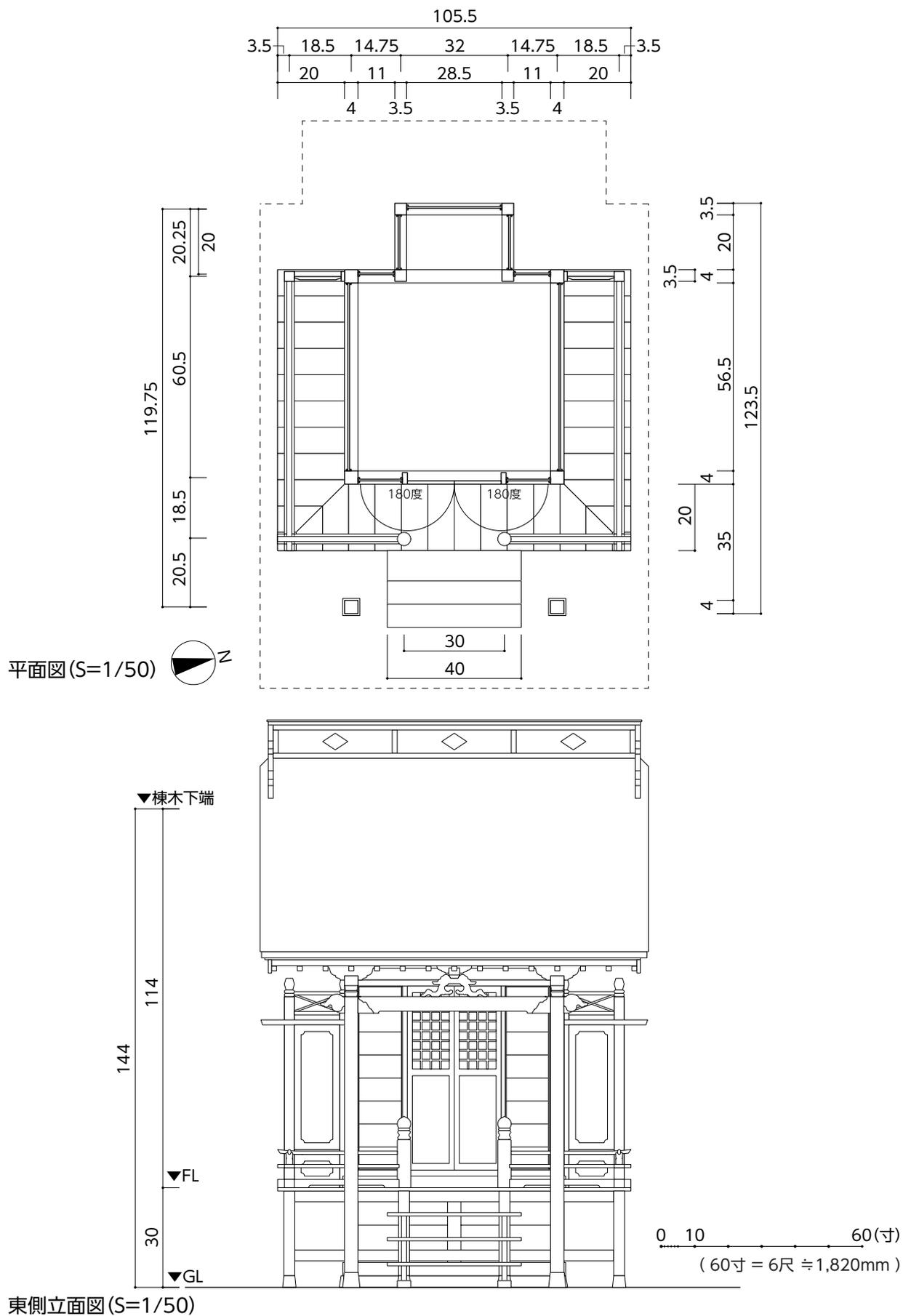


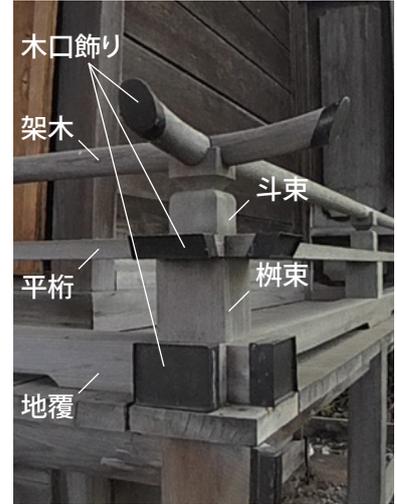
図2 女夫龍神社殿の実測図、社殿の各部詳細



身舎柱(左)から向拝柱(右)に掛かる虹梁



向拝各部



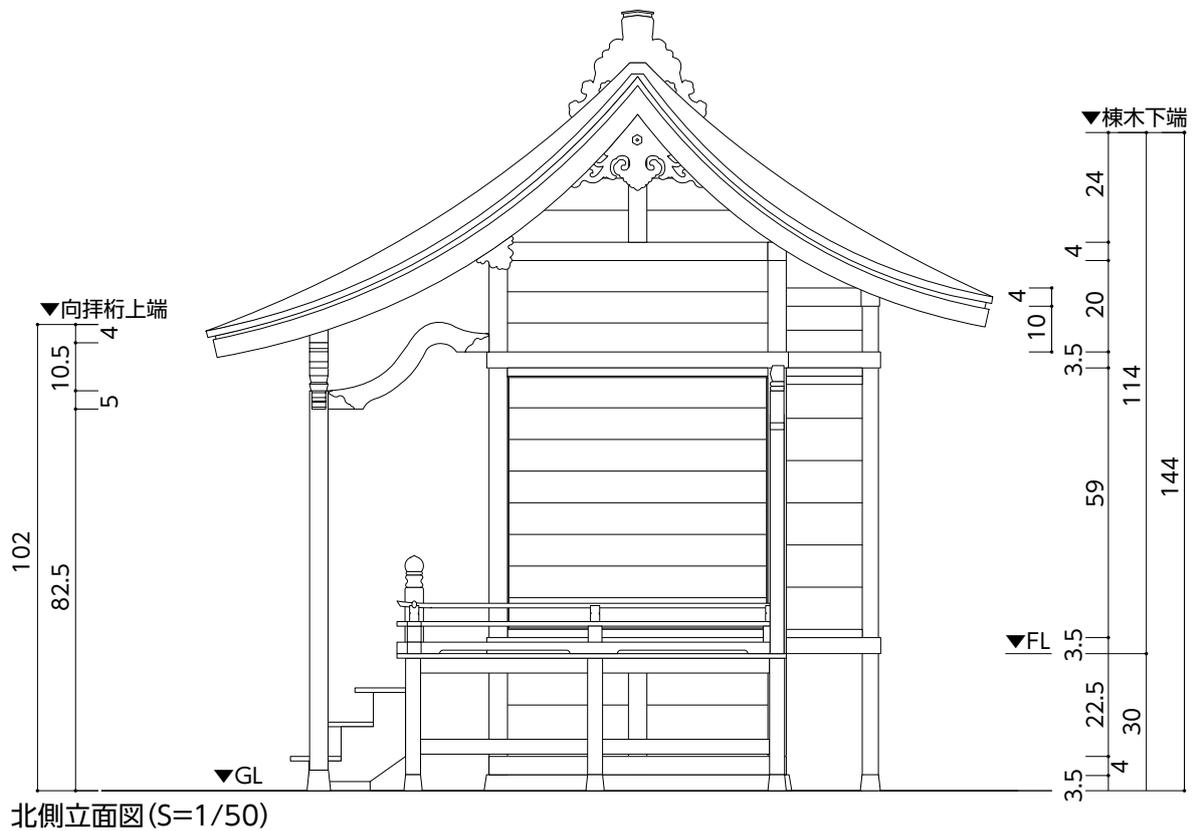
高覧各部



懸魚



墓股



(3) 基礎

身舎の基礎はコンクリート^{きだん}基礎で、その上に土台が回り身舎柱が建っている。内陣の側柱、縁束、向拝柱はコンクリート^{くつし}沓石の上に建っている。

(4) 軸部

身舎柱及び向拝柱は4寸角（120mm角）で、内陣の柱のみ3.5寸角（105mm角）で構成されている。身舎の地長押は床面から1寸（30mm）露出し、そこから内法寸法59寸（1788mm）の高さにせい3.5寸（105mm）の内法長押が回されている。内法長押から、内法寸法20寸（606mm）の高さに、桁行方向はせい4寸（120mm）の小屋梁が、梁間方向には4寸角の母屋^{うちのり}（丸桁）が通っている。なお、内陣部は、内法長押から内法寸法10寸（303mm）の高さに、桁行方向はせい4寸の小屋梁、外側の梁間方向に4寸角の母屋が通っている。

壁面は落とし板壁で、正面には各幅14寸（424mm）の両開き戸が設けられている。

また、身舎柱と向拝柱は虹梁^{こうらい}で繋がれている。向拝虹梁は、せい5寸（150mm）（柱との接続部の最大値）、幅4寸で、沓石上端より78寸（2367mm）の高さで取り付けられている。向拝柱上端部には、皿斗、大斗、雲肘木が組み、4寸角の向拝桁を支えている。なお、向拝虹梁上端からの内法寸法は10.5寸（318mm）である。

(5) 小屋組、屋根

棟木は小屋梁より内法寸法24寸（727mm）の高さで、推定4寸角である。小屋裏の確認ができなかったため、内部構造は不確定であるが、軸部の通りで母屋（丸桁、向拝桁含む）が通っている。身舎正面及び背面の丸桁、母屋より新たに地垂木^{しだるき}がのびている。

大棟には鬼板が取り付けられ、板金は一文字葺で葺かれている。屋根の側面には、破風が取り付けられている。



図3 女夫龍神社殿の北側

(6) その他造作等

両開き戸は、下部が鏡板で、上部が格子となっている。縁の高欄は、地覆、平桁、架木で構成され^{ますつか とつか}枘束と斗東で支えられている。正面側の親柱には擬宝珠金物、角部には木口飾りが取り付けられている。また、縁の端部にある脇障子は、下部は四方に凹凸の加工を施された鏡板、上部は竹の節欄間となっている。

破風には、懸魚^{げぎよ}が吊り下げられ、また正面側の身舎丸桁を隠すように装飾が施されている。

向拝虹梁及び桁の中心には、蟻股^{かえるまた}が取り付けられている。

(7) 修繕の履歴

表1にあるように、1985（昭和60）年に屋根を、また、翌1986（昭和61）年には、欄干、柱、側面を補修している。

（鈴木明世）

6 例祭の様子

女夫龍神（龍神様）の例祭は9月16日である。ここでは、2022（令和4）年9月16日の例祭の様子を記述する。

(1) 事前準備

事前準備については、祭主である本間茂氏の動きを記述する。

当日は松村亮一氏が事前に用意していた奉獻酒2本と2個の菓子を袋詰めしたもの（図版7-1）20袋、例祭で使用する道具類である太鼓と桴、燭台2組、蝋燭、マッチ、鋏、画鋏、幟一对、白布2枚、半紙、紙袋、ゴミ袋、タオル3枚、雑巾3枚、雨具、敷物（社殿の階段用）、組み立てテーブル、タープ（日よけ・雨よけ）を自家用車に積み、8時過ぎにマリヤ手芸店を出発した。

現地到着後、社殿内部にある机、賽銭箱、幟を外に出した。幟は参道正面両側に立て、賽銭箱は欄干左外側へ移動し、一番奥にしまう。机は階段下正面に配置し、白布をかける。社に掛けられている鈴は、取り外して移動した賽銭箱に載せた。社殿の中にしまっている2つの横長の台は、白布を掛けた。このとき、正面側は床につくくらいの長さになるよう整える。敷物を、社殿入口の敷居をまたぐようにして階段まで敷いた。社殿にある2つの朱色の三宝に、それぞれお菓子を盛り、奉獻酒2本と共に社の外欄干、正面両脇に供える（図版7-2）。社殿の両脇と道路際にある地藏や稲荷の祠に菓子と水を供える（図版7-3）。机を社殿の階段下正面に置き、白布を掛ける。太鼓は社殿の階段左側に配置し、組み立てテーブルは太鼓の手前に配置する。これらの準備を、宮司が

到着するまでに済ませた。

祭壇に供える魚や塩、米、野菜、果物は毎回宮司が用意している。本間茂氏によれば、三吉神社で日頃から付き合いのある業者に用意してもらっているということである。宮司到着後に、三宝に供物を載せ、組み立てテーブルに玉串（イチイに紙垂をつけたもの）と大麻（図版7-4）を載せた。供物は魚、米、一重ねの餅、神酒の入った徳利、大根やキャベツなどの野菜、リンゴやオレンジ、パイナップルなどの果物である（図版7-5）。魚に決まりはなく、過去にはブリを使用したこともあったという。

(2) 例祭

三吉神社の宮司佐藤千昭氏と、禰宜の北方靖章氏が時間前に到着し、例祭は予定通り10時から開催された。祭主の本間茂氏のほか参加者は松村亮一氏、松村智恵子氏、松村耕一氏、笠井信一郎氏、荒井亮子氏、新井玲奈氏といった親族のほか近所に住む女性1名の計8名が参加した。

10時になり、例祭を始める頃には宮司と禰宜が社殿に向かって右側に並び、参拝者は社殿の前に横並びになった。

禰宜が一礼して太鼓に向かい、太鼓を叩いたあと宮司の隣まで戻り、「ただいまより令和4年度女夫龍神祭を執り行います」と開式の詞を述べた。

そして禰宜は修祓の儀のため組み立てテーブルの前に移動し、大麻に二礼二拍手一礼をし、一礼しその姿勢のまま祓詞を奏唱した後、大麻を一本手に取り、社殿正面へ移動。そして、供物前で一礼して大麻を左右に二往復振り（図版7-6）、組み立てテーブル前に移動して玉串の上で手に持った大麻を二往復し、一礼したのち宮司の正面に移動した。宮司とお互いに一礼し、禰宜が宮司の頭上で大麻を振り、禰宜は参拝者側に向き直り、参拝者の頭上で左右に大麻を振った。そして組み立てテーブルに大麻を置き、宮司の隣に戻り、一礼した。

禰宜は社殿内へと移動し、神酒徳利の蓋を開け、外欄干に出て座って一礼、階段を下りて一礼し、宮司の隣に戻って一礼した。

そこで宮司が前に出て社殿正面に配置された机の前に立ち、二礼して祝詞を奏上、終了後二礼二拍手し、最初に立った位置に戻った。

禰宜が宮司と入れ替わるようにして、玉串の前に立ち、玉串を一つとって宮司の前まで運び、渡した。受け取った宮司は玉串を奉奠した。

その後、本間茂氏、松村耕一氏、笠井信一郎氏、松村亮一氏、新井亮子氏、新井玲奈氏、里見昌子氏、当館職員が続いた後松村智恵子氏の順に玉串を奉奠した。

全員が玉串を奉奠した後、禰宜が社殿内に入り、座し

て一礼して神酒徳利の蓋をした。そして一礼し、外欄干に出て座して一礼、階段を下りて宮司の脇に一度戻った。

禰宜は、太鼓の前に移動（図版7-7）。太鼓を叩いた後宮司の脇に戻り、参拝者側に向き直って「これを持ちまして令和4年女夫龍神祭、滞りなくご奉仕申し納めました。本日は誠にありがとうございます」と閉式の詞を述べた後一礼し、例祭は終了した。その後、関係者が社殿の前に集合し、本間茂氏が記念写真を撮影した（図版10-4）。

宮司と禰宜が持ってきたものは返却し、地藏や稲荷の祠に供えていたお菓子も回収、供物のお菓子は皆で分け合った。マリヤ手芸店に保管してあった道具類は、本間茂氏が再び自家用車に積んで持ち帰った。

（尾曲香織）

7 女夫龍神の月次祭と管理

女夫龍神（龍神様）の月次祭は毎月朔日である。ここでは、2022（令和4）年の月次祭と神社管理について記述する。

(1) 事前準備と祭祀の内容

事前準備として月次祭の前日までに榊、御神酒、米、塩、卵、水を準備しておく。榊はマリヤ手芸店経由で入手し、そのほかはスーパーなどで購入する。

月次祭の当日は、女夫龍神へ10時に着くように移動する。境内に到着後、まず分担して社殿内と境内を清掃する。清掃後、社殿の古い榊、御神酒、米、塩、卵、水を下げ、お賽銭を回収する。そして、新たな供物を供え終えると（図版8-1・2）、各自二礼二拍手一礼でお参りをする（図版8-3）。松村智恵子氏の場合は、小学校から高等女学校まで一緒だった同級生から教わった唱え言である「オンドメジンダマニジンダラソワカ」を必ず唱えている。

また、社殿での参拝が終わると、境内の地藏尊、馬頭観音碑、稲荷神の祠、福助に水を供える。これらの奉納物にも各自お参りする（図版8-4）。

参拝が終わると、供物の塩と米は、社殿四隅と向拝柱の礎石に撒く（図版8-5・6）。

(2) 女夫龍神の管理

5月1日（日）の月次祭は、祭主の本間茂氏のほか、松村智恵子氏、松村耕一氏の計3名が参加した。供物は、榊、塩、米、水、酒である（図版8-1）。当日の作業は、境内の清掃を行なった。

6月1日（水）の月次祭は、祭主の本間茂氏のほか、松村智恵子氏と近所に住む女性1名の計3名が参加した。供物は、榊、塩、米、水、酒、卵である（図版8-2）。

この時期、夏草が生い茂っていることから、当日の作業は草刈りをしてから（図版8-7）、境内の清掃を行なった。

7月1日（金）の月次祭は、祭主の本間茂氏のほか、近所に住む女性1名が参加した。供物は、榊、塩、米、水、酒、卵である。当日の作業は、草取りをしてから境内の清掃を行なった。

8月1日（月）の月次祭は、祭主の本間茂氏が、社殿と境内の清掃を行なった。供物は、榊、塩、米、水、酒である。当日の作業は、草取り、境内の清掃を行なった。

9月1日（木）の月次祭は、祭主の本間茂氏が社殿と境内の清掃を行なった。供物は、榊、塩、米、水、酒である。当日の作業は、草取り、境内の清掃を行なった。

10月1日（土）の月次祭は、祭主の本間茂氏のほか、松村智恵子氏が参加した。供物は、榊、塩、米、水、酒である。当日の作業は、木木々の枝切りのほか、境内の清掃を行なった。

9月16日の例祭以降から10月の月次祭までの間に、境内の馬頭観音と稲荷神の祠に、奉納者不明の四垂を付けたしめ縄が張られていた。

11月1日（水）の月次祭は、祭主の本間茂氏のほか、松村智恵子氏と近所に住む女性1名の計3名が参加した。供物は、榊、塩、米、水、酒、卵である。当日の作業は、落葉を集めてから（図版9-1）、境内の清掃を行なった。

12月1日（木）の月次祭は、祭主の本間茂氏のほか、松村智恵子氏と近所に住む女性1名の計3名が参加した。供物は、榊、塩、米、酒である。当日の作業は雪を払ってから（図版9-2）、境内の清掃を行なった。寒さから水が凍っていたことから、榊と水の交換をすることができなかった。

12月28日（水）には、祭主の本間茂氏と松村耕一氏が社殿の正月飾りを行なった。向拝には、間締め（図版9-3）、社殿の軒にマリア手芸店から入手したしめ飾りを飾る（図版9-4）。両開きの扉中央に札幌三吉神社の御札を飾った（図版9-5）。供物は、榊、酒である。榊は向拝柱の両側に間締めとともに飾った。

12月31日（金）には、祭主の本間茂氏が、社殿の雪

を払って酒を供えた。

正月三ヶ日には、祭主は関わらないが、初詣の参拝者がみられた（図版9-6・7）。

1月7日（水）には、祭主の本間茂氏が社殿の松飾りをはじめ整理した（図版9-8）。あわせて賽銭を回収した。

（舟山直治）

8 女夫龍神の周辺環境と自然による劣化

屋外文化財は、季節の移り変わりに伴う周期的な環境変化に加えて、突発的な事故や自然災害の影響を受けることから、常に厳しい自然環境に晒されていると言える。そのような中で女夫龍神がいま現在も地域の人々に親しまれている背景には、女夫龍神を後世に守り伝えようとしてきた本間・松村両家の尽力があり、定期的に人の手で文化財を守っていくことの重要性を物語っている。一方で、厳しい自然環境とのせめぎ合いの中においては、自然による劣化が人の手による保護を上回ることがあるのも事実である。これらの事実を記録しておくことには、屋外文化財の保存を考える上で大きな価値があると考えられる。ここでは90年以上の歴史を持つ女夫龍神において、どのような周辺環境の中で自然による劣化が生じたのかを記述する。

(1) 生物劣化

屋外環境は文化財の展示収蔵環境における生物被害の段階的レベルにおいては、最も厳しいレベル（レベル0）に位置している（木川 2010）。すなわち、博物館収蔵庫内などの管理された状況とは異なり、生物の活動を阻害する要素が全くないため、生物劣化の度合いが極めて大きい。女夫龍神境内に奉納されている稲荷神祠（表4-6、図版5-6）の手水鉢には地衣類が付着しているほか、社殿に用いられている木材の一部には腐朽と思われる痕跡が見られた（図5）。これらは屋外文化財の生物



図4 参拝者（2022年12月1日撮影）



図5 手水鉢への地衣類の付着（左）と木材の腐朽と思われる痕跡（右）（2022年11月30日撮影）

被害として、自然環境下では一般的なものである。一方で、文化財害虫による木材への食害の痕はほとんど見られず、害虫被害は比較的少ないようである。

(2) 物理的劣化

社殿に使われている木材は、その色や状態から、紫外線や雨風によると考えられる表面劣化が進行していた。(図6)。



図6 木材の表面劣化 (2022年11月30日撮影)

向拝柱はコンクリートの沓石の上に置かれて金物で固定されており、この沓石には破損が見られた (図7)。

沓石は金物で固定した部分の根本から破損しており、凍害によって内側から破損が進行したような痕跡が見られた (図7の丸で示した箇所)。社殿は隣の住宅や施設、自然木で囲まれているため、正面道路方向からの影響を除けば、強風はかなり緩和されていたと思われる。

一方で、正面道路方向に向かって立っていた二代目の鳥居は、風を軽減する障害物が少なかったためか、平成16年台風第18号 (激甚災害指定) によって2004年9月8日に倒壊している。現在倒壊した鳥居は元の姿には戻っていない (図8)。



図7 向拝柱の根本の部分 (2022年11月30日撮影)



図8 2004年に倒壊した鳥居 (2022年11月30日撮影)

(3) 化学的劣化

向拝柱と沓石をつなぐ鉄と思われる金物は腐食が進行していた (図7)。屋外環境では絶えず水分と酸素が供給されるため、極めて酸化が進行しやすい状況にあったと考えられる。一方で、木口飾に使われている銅と思われる金属は孔食性の腐食をしておらず、一部が緑青色の安定した状態に変化していた (図9)。



図9 木口飾に使われている金属 (2022年11月30日撮影)

(高橋佳久)

9 おわりに

本稿は聞き書き調査の一環として、2022（令和4）年5月1日から2023（令和5）年1月8日までに調査を実施した女夫龍神の祭祀の実態を報告してきた。

女夫龍神の例祭および月次祭などの祭礼を中心にこれまで聞き取り調査を進めて、祭祀の経緯について整理するとともに、建造物や奉納物の配置、例祭や月次祭などの現状を記録した。あわせて資料保存の見地から、周辺環境の中で自然による劣化がどのように生じているのかを記述してきたところである。

女夫龍神の祭祀の経緯を整理したことにより、本間家と縁戚関係にあった笠井家が祀っていた龍神を女夫龍神に合祀する過程を示すことができた。また、女夫龍神と油掛大黒尊天との関係について検討を深めることはできなかったが、油掛大黒尊天の奉納物が女夫龍神には皆無であることを示すことができた。

さらに、奉納物の整理からは、次のことを明らかにすることができた。一つは、笠井家の龍神は、妙正龍神と栄光龍神であること。二つに、本間家、笠井家のお札が混在していたように、合祀の際に生じる問題を改めて意識して検討する必要がある。

女夫龍神の社殿について、建立年を明らかにすることはできなかったが、現況調査により社殿の構造形式と規模について詳細にまとめることができた。

例祭と月次祭の調査では、女夫龍神が鎮座している町内だけではなく、近隣地域からの参拝者にも親しまれていることが理解できた。この信仰の背景には、百年近く龍神を祭祀してきた本間・松村両家が継続して祭神を守ってきた賜物といえる。

周辺環境下における社殿の劣化について、柱の一部に腐朽と思われる痕跡があり生物的劣化がみられる。また、木痩せなどにより材の亀裂のほか、継ぎ目に隙間や反りがあるなど物理的劣化もみられる。そして、金属などの腐食が進行しているなど科学的劣化も生じていた。

以上、現況調査の範囲ではあるが、女夫龍神の祭祀の実態をまとめることができたと考える。一方で、女夫龍神がどのような経緯を辿るのかは不透明のままである。

今後、地域に祀られている民俗文化財と博物館の役割について継続して調査を行うとともに、女夫龍神と油掛大黒尊天の関係、とりわけ油掛大黒尊天の祭祀について改めて調査を進めたいと考える。

（舟山直治）

註

- (1) 2020(令和2)年から2024(令和6)年の5ヵ年の研究プロジェクト。この研究概要は、戦中・戦後を生き抜いた人びとの生活の記憶、とりわけ日常の生活に関し、これまで見過ごされ、記録に残されてこなかった事象について、これまで記録されてこなかった記憶の聞き書き調査を重点的に進めていくことを目的としている。この聞き書き調査の中で、尾曲と舟山は積丹町の川下神の祭祀について継続が難しくなっている状況を記録し、それぞれ報告している(尾曲、2021・舟山、2023)。
- (2) 資料寄贈の情報を受けた後、実際に調査を実施したのは、5月1日である。この女夫龍神の月次祭調査時に、女夫龍神の所有者である本間茂氏をはじめ、松村智恵子氏、松村耕一氏から、将来的に女夫龍神の廃社を考えられていることを伺った中で、当館の「北海道における戦中・戦後のくらしの変化に関する聞き書き調査」として、祭祀の実態を情報として記録に残させていただきたいとお願いしたところ、両家から了解していただいた。
- (3) 資料の寄贈情報に基づいた調査は、2021(令和3)年10月14日に行った。井頭龍神社の調査を実施したが、山車櫓自体が大型であり、かつ日程的にも検討する時間がないことから収集はできないと判断した。
- (4) 「札幌時空逍遥」の2014(平成26)年7月27日付けの「女夫龍神」(keystonesapporo, 2014)に対して、10月22日付けのコメントに油掛大黒尊天についての情報提供がある。この情報は、「徳風」10月号に、以前に祀っていたところから石狩市厚田区望来の札幌霊園へ移転した油掛大黒尊天の開眼式の日時が示されている、というものである。この情報にあわせて「札幌時空逍遥」の開設者は、女夫龍神境内にあった油掛大黒尊天と推察していることをリプライしている。
- (5) 表1の作成にあたっては、松村智恵子氏の「女夫龍神由来①、②」(図10-1、図10-2)、本間時之助作成の家系図(図10-3)、「北海石版所記念誌」、および奉納物にある奉納年を基に作成したものである。
なお、表中では敬称を略している。
- (6) 油掛大黒尊天の遷座は2011(平成23)年の土地売却前に行われたと考えられる。
- (7) 油掛大黒尊天の祭神は、下記のイメージ図にあるように祠内に祀っていた。祭日は毎月甲子の日。祭神は油の張った桶に納められていた。参拝者は桶内の油をひしゃくにとって祭神にかけたという。



油掛大黒尊天のイメージ図（松村耕一氏作成）

謝辞

この資料を紹介するにあたり、本間茂氏、松村亮一氏、松村智恵子氏、松村耕一氏、笠井信一郎氏、荒井亮子氏、新井玲奈氏、佐藤千昭氏、北方靖章氏、里見昌子氏のみなさんには、祭礼や月次祭などの調査や聞き取り調査において、資料の提示などいろいろとご教示をいただきました。

ここに記して厚く感謝申し上げます。

引用文献

- keystonesapporo 2015. マリヤ手芸店、北海石版、女夫龍神、馬車道 <http://keystonesapporo.blog.fc2.com/blog-entry-177.html>. 札幌時空逍遙.
- keystonesapporo 2014. 女夫龍神 <http://keystonesapporo.blog.fc2.com/blog-entry-6.html>. 札幌時空逍遙.
- 尾曲香織 2021. 「女性から女性へのアプローチ—北海道における民俗調査の現状から—」女性民俗学研究会第700回記念例会 シンポジウム「未来学としての民俗学」, 2021年4月25日、口頭発表(オンライン).
- 木川りか・Tom Strang 2010. 文化財の展示取蔵環境の段階的レベルに応じた生物被害対策について. 文化財の虫菌害 60: 4-13.
- 「北海石版所記念誌」コピー (B5, 16頁)
- メタ佐藤 2017追記. 札幌 石山通り沿いの女夫龍神 https://ryujin.metasato.com/ryujin/126_sapporo_meotoryujin/ryujinDetail.html. 虫の知らせ: 126.
- 舟山直治 2023. 研究活動報告 これまでの調査研究について. 北海道博物館ちゃれんがニュース, 31: 4-5.
- 山崎長吉 1995. さっぽろ歴史散歩 山の辺の道—定山溪紀行. 北海道出版企画センター.
- 歴史之足跡 札幌之碑 2017. 女夫龍神. <https://rekishinoashiato-west.amebaownd.com/posts/7704029/>. あしあと: 517.

図版1



1 女夫龍神社殿



2 女夫龍神境内入口付近、北側から撮影



3 女夫龍神境内入口付近、南側から撮影



4 女夫龍神境内入口付近、西側から撮影



5 女夫龍神境内裏、南側から撮影

図版2



1 神棚 (表 2-1)



2 御鏡 (表 2-2)



3 灯籠 (表 2-3)



4 狛犬 (表 2-4)



5 木立像 (表 2-5)



6 珠 (表 2-6)



7 御札 (表 2-7 の表側)



8 御札 (表 2-7 の裏側)

図版3



1 双頭白蛇 (表 2-8)



2 双頭白蛇 (表 2-9)



3 双頭白蛇 (表 2-10)



4 双頭白蛇 (表 2-11)



5 双頭白蛇 (表 2-12)



6 双頭白蛇 (表 2-13)



7 双頭白蛇 (表 2-14)



8 双頭白蛇 (表 2-15)

図版4



1 厨子 (表 3-1)



2 厨子と御札 (表 3-1,-2)



3 御札 (部分) (表 3-2)



4 御札 (表 3-3 の表側)



5 御札 (表 3-3 の裏側)



6 御札 (表 3-4)



7 御札 (表 3-5)



8 御札 (表 3-6)

図版5



1. 地蔵尊 (表 4-1)



2. 地蔵尊 (表 4-2)



3. 馬頭観音碑 (表 4-3)



4. 馬頭観音碑 (表 4-4)



5. 地蔵尊 (表 4-5)



6. 稻荷神祠 (表 4-6)



7. 福助 (表 4-7)



8. 稻荷神?祠 (表 4-8)

図版6



1 自然石 (表 4-9)



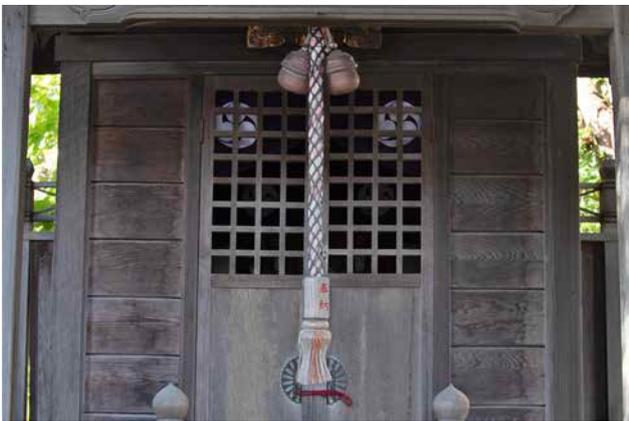
2 手水舎 (表 4-10)



3 古い神額



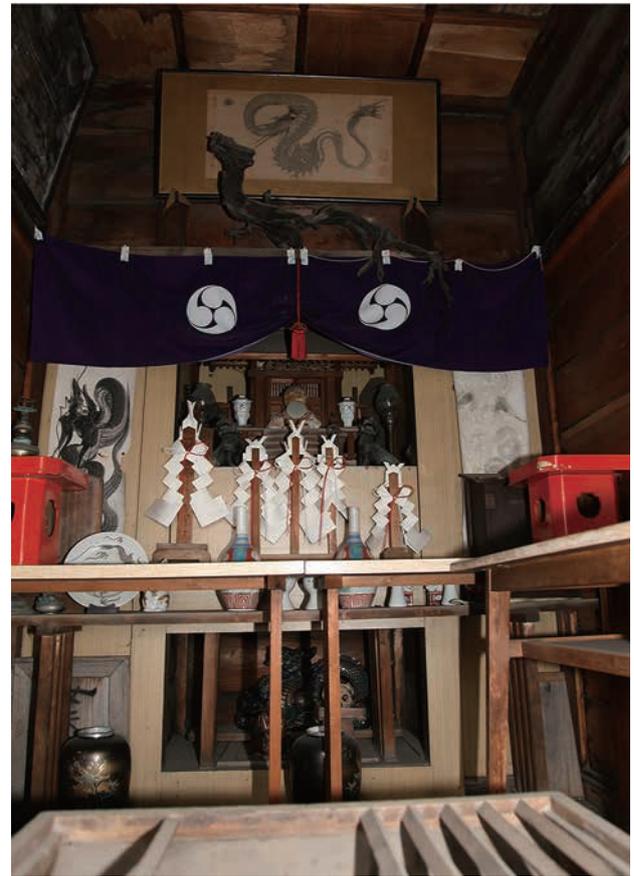
4 神額 (表 4-11)



5 奉納鈴 (表 4-12)

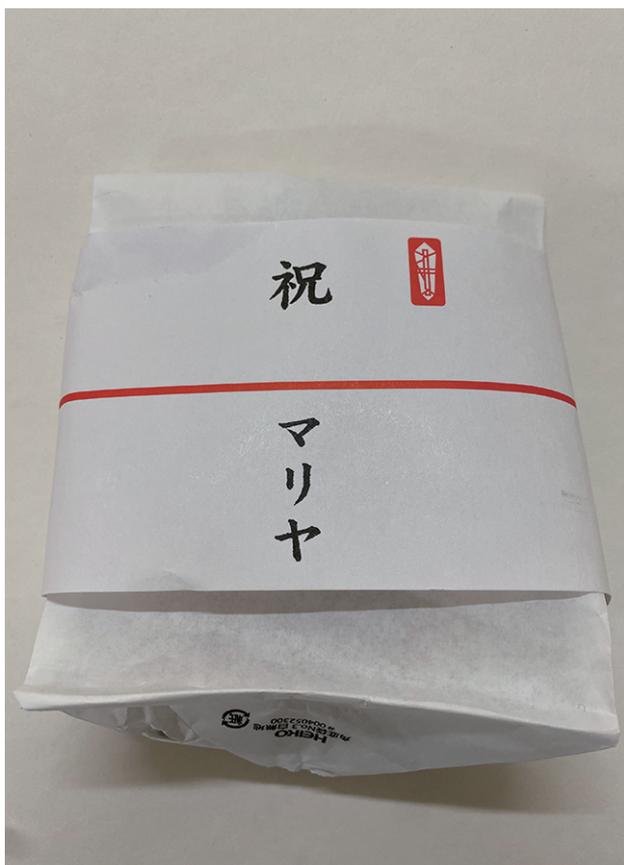


6 奉納鈴の部分



7 内陣の飾り

図版7



1 菓子を袋詰めしたもの



2 お菓子盛りと奉献酒



3 稲荷の祠に菓子和水を供える



4 イチイに紙垂をつけた玉串（左）と大麻（右）



5 神前に供えられた供物



6 供物前で大麻を振る様子



7 閉式前の太鼓

図版8



1. 月次祭の供物 (5月1日)



2. 月次祭の供物 (6月1日)



3. 月次祭のお参り (10月1日)



4. 稲荷神へのお参り (10月1日)



5. 月次祭後の塩撒き (7月1日)



6. 月次祭後の米撒き (7月1日)



7. 女夫龍神境内の草刈り (6月1日)



8. 女夫龍神境内の枝払い (10月1日)

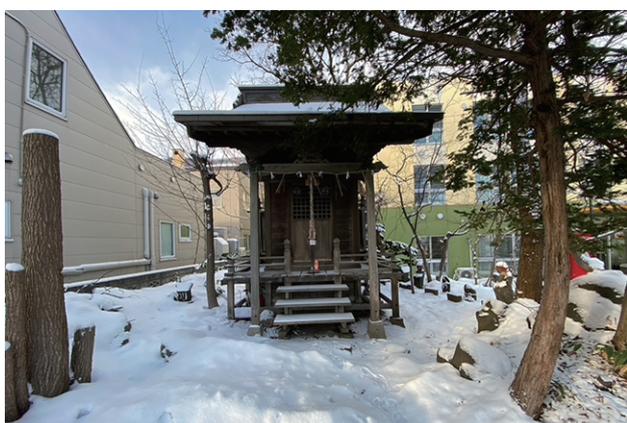
図版9



1. 落葉集め (11月1日)



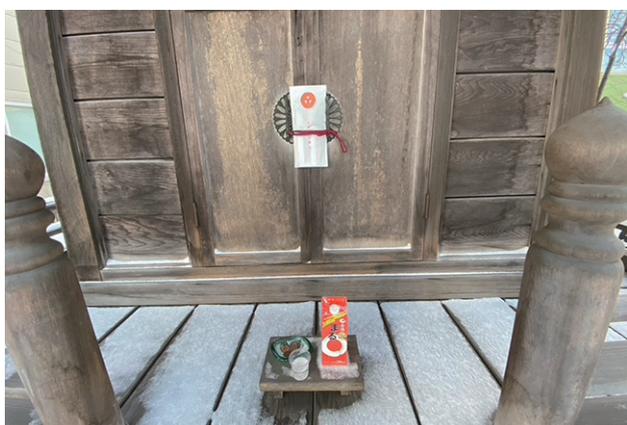
2. 雪払い (12月1日)



3. 社殿の間締め (12月28日)



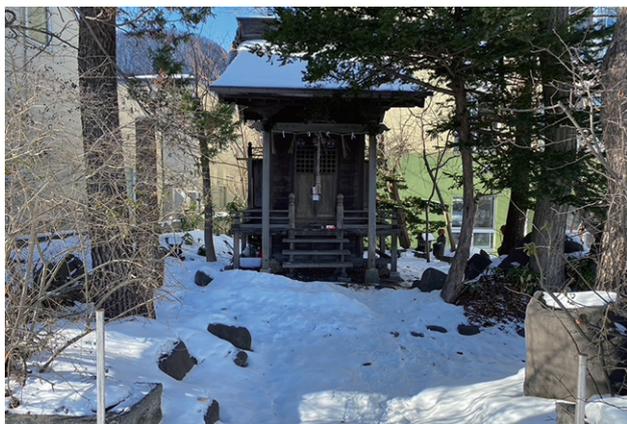
4. 社殿のしめ縄 (12月28日)



5. 札幌三吉神社の御札 (12月28日)



6. 元旦風景 (1月1日)



7. 正月三が日 (1月3日)



8. 正月飾りを外す (1月7日)

図版10

女夫龍神

所在地 札幌市中央区南28条西1丁目
 建立 昭和3年 本間トク
 例祭 九月十六日
 教義 神の守護を信じて心身の平安と求め、
 神を以て人と交り世の平和を祈念する

本間トク(昭和18年)長女本間テイ(昭和18年)
 以後本間章介(昭和18年)が祭祀を行っている
 以後本間章介の妻本間茂が
 継承し現在に至る

昭和27年 子守代田町一丁目堂井工(昭和28年)が
 小祀りとして意匠林を合祀

昭和53年 鳥居を新しくす

昭和60年 屋根の修復

昭和61年 欄干、柱側面、修復

平成16年 鳥居を新しくす

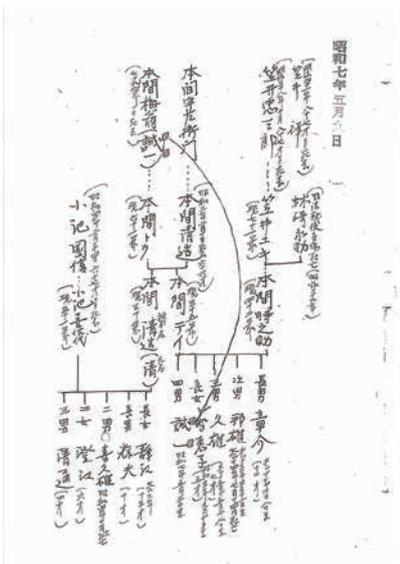
1. 女夫龍神由来①

女夫龍神

所在地 札幌市中央区南28条西1丁目
 建立 昭和3年 本間トク
 例祭 9月16日
 教義 神の守護を信じて心身の平安と求め、
 神を以て人と交り世の平和を祈念する

本間トクの長女本間テイ(昭和18年)本間章介(昭和18年)
 以後本間茂が祭祀を行っている
 昭和37年 子守代田町一丁目堂井工(昭和32年6月18日)が石まつりとして
 意匠林を合祀
 昭和53年 鳥居を新しくす。昭和60年 屋根修復。昭和61年 欄干、側面、修復
 平成16年 鳥居を新しくす(親和建設工業株式会社)

2. 女夫龍神由来②



3. 本間時之助作成家系図



4. 祭祀終了後の記念撮影 (本間茂氏提供)

Rituals of Meoto-Ryuujin

Survey on the Current State of Shrines Related to the Passing Down of Beliefs and Rituals by Families

FUNAYAMA Naoji, OMAGARI Kaori, SUZUKI Akiyo and TAKAHASHI Yoshihisa

This paper is a report on Meoto-Ryuujin, researched from May 1, 2022 to January 8, 2023, as part of the "Interview Survey on Changes in Life in Hokkaido during and after World War II".

Specifically, we interviewed people mainly about the rituals such as the annual and monthly festivals associated with Meoto-Ryuujin, in order to

organize the history of the rituals, as well as to record the structure and actual measurements of the buildings, the types of votive offerings, and the current status of the rituals. In addition, from the viewpoint of conservation science, we have provided a description of the type of deterioration caused by nature in the surrounding environment.